

『新札幌市史』完結記念シンポジウム雑感

(総務局行政部文化資料室資料担当係長 竹内 啓)



3月28日に開催された『新札幌市史完結記念シンポジウム』について主催者側というよりは全く個人的な雑感といったものを書かせていただきます(なお、正式の報告書も本ニュースとほぼ同時期に発行の予定ですので、ぜひご参照ください)。

このシンポジウムについては前年の予算要求時点から企画はあったのですが、市史最終巻「年表・索引編」の校正作業が押し気味だったこともあって、正式に編集会議の議題にかけたのは平成20年も明けてからのことでした。

担当者が企画を温め過ぎたことは確かに大きな反省材料ですが、この編集会議に諮った時点では既に東京大学史料編纂所山本博文教授から基調講演講師の内諾をいただいていた。

「新札幌市史の完結記念シンポジウムに近世史の専門家？」意外な人選に驚かれる向きもありましたが、一方では日本エッセイスト・クラブ賞受賞者である山本先生の軽妙な話術と、現在NHKで放映中の「篤姫」人気に当シンポジウムもぜひともあやかりたいという主として集客面での期待があったことも否定できません。

結局、講演のテーマは「史料から歴史を探る」



講演会「新史料から探る大奥と篤姫」



パネルディスカッション「新札幌市史をどう継承するか」

に決まりましたが、これが意外に奥の深いテーマでした。『新札幌市史』を含め、自治体史の今日的な刊行目的をこの点に見ることも可能かと思われまます。27年という長期事業の間には新史料の発見やそれに伴う新解釈の創出といった展開は避けて通れませんが、そのことのみで旧史料の価値が全否定されるものではありません。むしろ評価の対象となるのは 的確な史料の利用と それを通して市政を検証する問題意識の一貫性及び その帰結である史的解釈の完成度なのではないでしょうか。その意味では『新札幌市史』は長期的な視野で学術専門的かつ体系的に行われた行政評価的側面を持っており、同様に新札幌市史で取り上げられた公文書(行政文書・行政資料)群は市民に対して市政の説明責任を果たすもの(ある意味では行政評価指標)ともいえます。ただ、市史で使われた公文書群が経済的合理性重視のミクロ的指標というよりは、むしろより巨視的で通観性に満ちたマクロ的指標であることはその性格上も当然です。今後、市史史料を早期に公開していく必要性・重要性はこの点にも見出せます。

こうした観点に立てば、1)江戸時代(大奥)の時代考証あるいは生活資料の読み解きと2)自治体史を通した市政検証との間には一見何の結びつきもないように見えながら、実はどちらも史料を駆使した歴史解釈の成果である点では共通しており、今回掲げた講演テーマは普遍的でありながら、また同時にタイムリーなものであったともいえる訳です。

余談ですが、私は昨年10月24日に山本先生とは東大史料編纂所の同僚である保立道久教授の講演をお聞きする機会がありました(EASTICAシンポジウム基調講演「東アジアにおけるアーカイブズの共有と歴史学」)。その講演の中で保立先生が「歴史学はアーカイブズの下僕である」という大変刺激的な発言をされていたのが強く印象に残りました。また、つい先日(6月9日)には同じく東大史料編纂所からアーカイブズ教育の道に進まれた高埜利彦学習院大学教授(日本アーカイブズ学会会長)の講演(「国際アーカイブズの日」記念講演会基調講演「世界のアーカイブズに学ぶ」)もお聞きしました。この中で高埜先生が「わが国には現在、青銅器(アーカイブズ文化)と鉄器(デジタル革命)がほぼ同時に伝来してきており、今後その受容の仕方が大変重要な鍵となる」という内容のお話をされていましたが、わが国のアーカイブズ事情を端的に捉えた抜群の比喻であると感心しました。

保立先生、高埜先生ともに現在アーカイブズ学に深く関わっておられますが、山本先生にも一度こうした諸発言についてのご感想をお聞きして

みたい気がします。

さて、話が脱線してしまいましたが、シンポジウム当日は比較的高齢の方を中心に会場の椅子が足りなくなるほどの来場者に恵まれました。あらためて、市民の方々の歴史に対する関心の高さや大奥・篤姫人気の根強さなどを実感しました。地域資料・郷土資料の発掘に情熱を傾けている方々の報告も感動的でした。

パネルディスカッションのタイムキーピングについては幾つか苦言もいただきましたが、当初から予定調和的な結論を用意すべき場ではないとも考えていました。



長期にわたる刊行事業の中でも初開催となるイベントでしたが、今回の経験をよい教訓として、今後も事業活動のターニングポイントには積極的にシンポジウムなどを企画して大勢の方々から広くご意見をいただきたいと考えています。

これまでの『新札幌市史刊行事業』及び『完結記念シンポジウム』へのご支援・ご協力、本当にありがとうございました。



去る平成20年3月28日に開催しました『新札幌市史』完結記念シンポジウムには、延べ約200人の方に参加していただき、盛況のうち無事に終了することができました。

このシンポジウムを後世につなげるため、また、今回参加できなかった方々に知っていただくために、講演会とパネルディスカッションの内容をまとめた開催報告書を発行いたしました。

文化資料室で閲覧できる他、札幌市立各図書館等公共施設に配布します。詳細についてはお問い合わせください。また、文化資料室ホームページにも掲載いたします。

郷土史相談室だより④

ふたつの雪まつり

郷土史相談室では札幌の歴史に関するご相談を受け付けております。お気軽にお問い合わせください。☎ TEL・011-521-0207

○十日町市と札幌市

4月17日、十日町市立川西中学校の生徒11人が、修学旅行の班別研修として文化資料室を訪れました。十日町市は新潟県南部にある、魚沼産コシヒカリに代表される稲作と、明石縮や十日町緋等の織物を主要産業とする人口6万人余の街です。十日町市では就業者の半数以上が第1次・第2次産業に従事していますが、札幌市では第3次産業に特化しており、両市は特徴の異なる街という印象をもちました。

あらかじめ知らされていた研修テーマは、「北海道の伝統工芸、文化の伝承事業、アイヌの生活文化、さっぽろ雪まつり、札幌の農業、洋風建築、埋蔵文化財」等で、中でも一番多かったのが雪まつりに関する質問でした。中学生達の事前学習によると、十日町市でも「雪まつり」が行われているらしく、両市の共通点を教えられました。「さっぽろ雪まつりはなぜ広まったのか、大勢の観光客が訪れるようになったのはなぜか、観光客を集めるために行っている宣伝方法は何か」という彼らの質問からは、農業ときもの産業の停滞によって人口が減少し続けている十日町市の再生を願い、今や国際的なイベントにまでなっている「さっぽろ雪まつり」の宣伝手法にその道を探ろうとする、郷土への熱い想いが伝わってきました。

○冬季観光の振興

さっぽろ雪まつりの宣伝手法を調べてみると、やはりそこには興味深い意図がありました。かつての北海道観光といえば、観光客は本州の梅雨や真夏の暑さを避けて北海道を訪れたことから夏に集中し、冬の訪れとともに客足がパッタリ途絶えるのが通例でした。この致命的な弱点を克服しようと、札幌市と札幌観光協会は 冬季観光 を売り出し始めたのです。具体的には、昭和30年代前半から冬季観光ルートの新設、観光施設の冬季割引、冬の定期観光バスの開設、本州での冬の観光映画・ポスター展の開催等を行っています。さっぽろ雪まつりにおいては、雪まつりを単独で宣伝するのではなく、他の催し（第9回国体スケート競技大会 昭29）とタイアップするなど、広い視野で 冬の札幌 を捉えたことが、その秘訣だったといえるでしょう。

○同期の友好イベント

こうしたことを調べている中で、十日町市との共通点を示す資料にも出くわしました。さっぽろ雪まつりと十日町雪まつりは、同じ昭和25年に開始されており、しかもそれを機縁に、昭和53年第29回からは、友好イベントとして相互交流しているというのです。詳しく見てみると、十日町雪まつりは第1回が札幌より2週間ほど早い2月4（～5）日に開かれていますから、さっぽろ雪まつりの先輩格に当たりませう。雪（氷）像を通して海外各国との交流も広がる中で、国内で交流を続けている唯一のケースが十日町雪まつりなのです。基幹産業を比べた時には対照的な街に思えた十日町市が、にわかには身近に感じられるようになりました。

○「十日町市への提言」

研修を終え2週間ばかり経った頃、川西中学校の皆さんからお手紙をいただきました。「両市の雪まつりが友好イベントであることに驚いた。友好イベントの交流内容を調べたい」という声が多くある中に、氷のアート（氷像）に興味を持ったというものもありました。十日町市では冬を通して平均気温が氷点下を下回ることがないため、雪像は見慣れていても、氷像は珍しかったようです。

今回の研修成果は十日町市への提言としてまとめとりました。氷のアートの制作と、十日町雪まつりを他の催しと合わせて宣伝する方法を提言したいとあり、具体的に、来年新潟市で行われる中学生のスポーツ全国大会と国体冬季大会と合わせて、十日町雪まつりをPRするプランも記されていました。お手紙は、今回の研修成果を十日町市の発展につなげたいと結ばれていました。（郷土史相談員 橋場ゆみ子）

企画展情報

文化資料室所蔵物展『札幌都市計画の地図』開催
(平成 20 年 7 月 25 日～10 月 30 日)

大正から昭和にかけての都市計画のために行った調査によって作成された資料と地図を中心に展示します。

- 日時 文化資料室の開館日・時間(下記「利用のご案内」をご覧ください。)
- 会場 文化資料室オープンスペース(札幌市中央区南8条西2丁目 文化資料室2階)

* 行事予定 *

...行事を行っている間は特別開館し、一般の方もご利用いただけます。

ジュニア・ウィークエンドセミナー 札幌の歴史探検～歴史新聞をつくろう!～

札幌の歴史に詳しい先生の話や、文化資料室にある写真・地図などを使って「札幌の歴史新聞」をつくろう!

- 場所 ■ 文化資料室2F 郷土史相談室
- 対象 ■ 小学校4年生～中学生
- 定員 ■ 12人(応募者多数の場合は抽選とします)
- 時間 ■ 10:00～12:30
- 講師 ■ 榎本洋介(文化資料室職員)

- → → 開催テーマ → (テーマ、開催日、申込締め切り)
- 工場地帯の移り変わり.....9月20日(9月10日締め切り)
 - 村まつりからよさこいへ...10月25日(10月16日締め切り)
 - サケのそとと下水.....12月6日(11月27日締め切り)
 - 冬の生活.....2月7日(1月29日締め切り)

お申込方法 (ジュニア・ウィークエンドセミナー)

電話、ハガキまたはEメールで下記住所へお申し込みください。ハガキ、Eメールの場合は講座名、住所、氏名、年齢、学校名、電話番号をご記入ください。

2008年度 文化資料室 古文書講座

*中級コース「史料で読む札幌の歴史」

- 日時 ■ 平成 20 年 9 月 17 日(水)、24 日(水)の2日間。18:00～20:00
- 場所 ■ 文化資料室2F 市史会議室
- 講師 ■ 榎本洋介(文化資料室職員)
- 対象 ■ 市内に居住か通勤・通学する、古文書をある程度読めて、2回参加できる方。定員 30 人(抽選)。

申込締め切り 9月5日(金) 必着

*上級コース「札幌歴史ゼミナール」

- 日時 ■ 平成 21 年 1 月 17 日(土)、2 月 14 日(土)、3 月 16 日(土)の3日間。14:00～16:00
- 場所 ■ 文化資料室2F 郷土史相談室
- 講師 ■ 榎本洋介(文化資料室職員)
- 対象 ■ 市内に居住か通勤・通学する、古文書が読めて、3回参加できる方。定員 10 人(抽選)。

申込締め切り 1月5日(月) 必着

お申込方法 (古文書講座)

往復はがきに、ご希望のコース(中級・上級のいずれか)、郵便番号、住所、氏名、電話番号、年齢をご記入のうえ、下記住所までお送りください。

※)お電話での申し込みはお受けしておりませんのでご了承ください。

文化資料室 利用のご案内

開館時間 8:45～17:15 入館料 無料
 休館日 土・日・祝日・年末年始(12月29日から1月3日)
 郷土史相談室・札幌の歴史展示室がご利用になれます
 ご来館の際は公共交通機関でお越しください

交通アクセス / 東豊線「豊水すすきの」駅下車6・7番出口から徒歩3分、
 または南北線「中島公園」駅下車1・2番出口から徒歩3分



さっぽろ市
05-500-07-882
19-6-226

文化資料室ニュース 第5号・2008年7月

発行 札幌市文化資料室 〒064-0808 札幌市中央区南8条西2丁目

Tel・文化資料室事務室 011-521-0205, 郷土史相談室 011-521-0207 Fax・011-521-0210

E-mail・shiryoshitsu@city.sapporo.jp URL・http://www.city.sapporo.jp/bunkashiryo/